

20メートル先に注意して歩く

遊びの中で距離感覚体得

子どもは歩くことで世界を広げる。それだけ「危ない人」と遭遇する確率も上がる。そこで今回は、危な

い人、つまり犯罪者がどの時点で標的を定めるのかを考えたい。

犯罪時の「やる気」について、元犯罪者のグループが対象に聞き取り調査と実験を行った結果によると、犯罪者は「やる気モード」全開で、距離が三~四倍に縮まった時点で「繩張りに入った!」とばかりに襲ってくる。その前に、子どもは横に動いて距離を稼

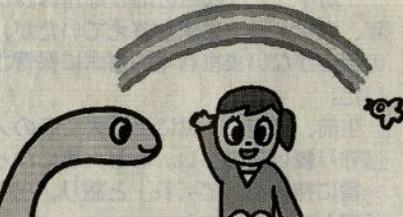
こうすれば助かる!

子ども安全学入門



3.29

(日本女子大教授)
(日曜日に掲載)



清永 賢二



験をした。その結果、犯罪者は子どもの約二十秒前で狙いを定め、六秒になつた地点で行動を起こすと分かった。子どもは二十秒先にどんな人がいるか見ておき、六秒に近づく前に「変な人」「怪しい人」「危ない人」のいずれなのか見極めなければならない。

それには、歩行中にしっかりと前を見ることが大事で、その意味で「キヨロキヨロせずに前を見て歩きなさい」は正しい。

しかし同時に、十歳前後の子どもの目と体の発達は不十分で、キヨロキヨロしなければ周囲に気を配れないことも知つておきたい。「キヨロキヨロしてもいいから、どんな人が前にいるか注意しておこう」が、望ましいアドバイスとなる。「どのようにすれば違うか」も、非常に重要な

前から来るのが「危ない人」だった場合、その人物は六秒先から「やる気モード」全開で、距離が三~四倍に縮まった時点で「繩張りに入った!」とばかりに襲ってくる。その前に、子どもは横に動いて距離を稼

ぎ、それでも相手が追随しきたら、全速力でダッシュ。ユしなければ危ない。犯罪者は一般に、標的の手などをつかもうとする際に、瞬間に足を一步前に出し、そこから手を伸ばす手順を踏む。その「魔の手」から逃れるには、少なくとも加害者の身長の一・三倍の距離を保つたまま、それ違う必要がある。

こうした距離感覚は本当に、鬼ごっこなどの遊びの中で身についたものだつた。しかし、子どもが群れて遊ばなくなつた今、幼稚園や小学校の園庭、校庭に専用の施設を設け、距離感覚を体得させる試みも検討されるべきだ。現代っ子は、文明の中でも退化した「野生の勘」を取り戻す必要がある。